

超未熟児に関する調査研究

(分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)

研究協力者 竹 内 豊
共同研究者 喜 田 善 和

key word：超未熟児、緊急母体搬送

研究の目的：超未熟児の発生状況と入院までの経過、生命予後を知る目的で研究班員施設におけるデータを収集した。

〔対象〕対象としたのは1991年度に下記の施設に入院した出生体重1000g未満の超未熟児である。

研究協力施設は埼玉医科大学総合医療センター、埼玉県立小児医療センター、松戸市立病院、北里大学、東邦大学、新潟大学、新潟市立病院、高槻病院、神戸大学、兵庫県立こども病院、愛媛県立中央病院、聖マリア病院である。

結 果：これらの12施設に収容された超未熟児は251例あった。それらの在胎週数別、出生体重別内訳を表1に示す。性比は男118例、女133例であった。

母の就業率は25.7%とやや高いようであった。母と父の体格、学歴については殆ど聴取されておらず検討できなかった。

出生場所としてはNICUを有する施設におけるいわゆる院内出生が166例(66.1%)と多かった。166例の院内出生児の内緊急母体搬送されていたものは134例(80.7%)であった。

院外出生児85例の場合、新生児を十分にみられる医師の出生立会いを受けていたものは47例

(55%)でNICUへの搬送に当たって新生児科医がこれを行ったものは78例(92%)であった。

分娩様式では経膈自然分娩134例(53.4%)、帝王切開111例(44.2%)と帝王切開率が高くみられた。

分娩前、中の胎児心拍モニターに関しては、異常あり66例、異常なし93例であったが、残念なことにこの結果が不明なものが未施行も含めて92例もあった。

退院後の家庭環境、地域の保健婦などの関与に関する調査については殆ど回答が得られず集計不能であった。

院内外出産と生命予後についてみると表2のようになった。院内出産166例を初めから自院にて観察した母体搬送のない32例と緊急母体搬送を受けた134例に分けて院外出生例5例と比較した。平均の在胎週数と出生体重には有意差がない。死亡退院率では緊急母体搬送群が一番高く院外出生群がこれについだ。

早産となる異常発生から出生までの主な産科管理を受けた施設を解析してみると母体搬送群では院内でこれを受けていたものが多く、院外出生群では診療所など一次施設でこれを受けていたものが多くみられた。

これらのグループの合併症などを含めた患者

背景を表したものが表3である。異常発生から分娩までの期間をみると母体搬送群では平均12.9日であり院外出生群の平均6.8日の約倍の期間産科管理が行われたことになる。合併症として羊水過少、母体発熱、児の敗血症などが多くみられており予後に対して感染の影響が大きかったことを示唆している。

しかし、このデータだけをみて院外出産の方が予後がよいとは言えない。院外出産の場合にはNICUに収容された児について検討対象となったのであって出産施設にて死亡した死産児や新生児死亡児の数は不明のままである。

考 察：今回本研究班員施設の超未熟児の在胎週数別、出生体重別内訳では比較的未熟度の高い症例が多く、死亡退院が多いのはこのためと思われた。

超未熟児の家庭環境、社会的背景については残念ながら情報を得ることが出来なかった。これについては今後prospectiveに積極的に調査して行きたい。

院内外出産と予後との関係についても全体の新生児死亡、あるいは死産数が把握できないとその成績を比較検討して論ずる訳には行かない。行政的にこれが可能となるように強く勧告をして行きたい。

表1 超未熟児の内訳

1, 在胎週数別

在胎週数	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	合計
入院数	6	23	36	41	58	32	14	16	10	5	3	4	3	251
死亡退院数	5	16	18	17	18	7	3	5	4	1	0	0	0	94
生存退院数	1	7	18	24	40	25	11	11	6	4	3	4	3	157

2, 出生体重別

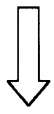
出生体重g	300	400	500	600	700	800	900	合計
入院数	2	10	27	37	32	77	66	251
死亡退院数	1	9	19	19	13	18	15	94
生存退院数	1	1	8	18	19	59	51	157

表2 出生場所と生命予後

	院内 166例		院外 85例
	母体搬送 (-) 32例	母体搬送 (+) 134例	
在胎週数w	26.8 ± 2.47	26.5 ± 2.38	26.5 ± 2.48
出生体重g	808 ± 145.9	777.1 ± 152.6	793.9 ± 141.3
死亡退院: 生存退院	7: 25	57: 77	27: 58
死亡率	21.9%	42.5%	31.4%
主な産科管理を受けた場所	院内 32	緊急 3 一次 12 二次 9 院内 110	緊急 2 一次 59 二次 24

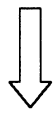
表3 超未熟児患者背景

	院内166例		院外85例
	母体搬送（－） 32例	母体搬送（＋） 134例	
分娩様式 CS(%)	CS 15(46.9%)	CS 60(44.8%)	CS 23(27.1%)
モニター			
不明	1		34
異常なし	19	88	38
異常あり	12	46	13
分娩の異常			
なし	10	28	26
胎児仮死	10	57	22
PROM	11	54	18
羊水混濁	9	16	13
羊水過少	4	26	6
前置胎盤	1	15	6
胎盤早剥		11	6
母体発熱	3	13	3
Apgar 5分	6.7	6.9	5.6
新生児経過			
ショック	6(18.8%)	26(19.4%)	28(32.9%)
人工換気	27(84.4%)	111(82.8%)	73(85.9%)
STA補充	17(53.1%)	72(53.7%)	48(56.5%)
敗血症	7(21.9%)	39(29.1%)	19(22.4%)
脳室内出血	7(21.9%)	27(20.1%)	23(27.1%)
異常発生から	21.9	12.9	6.8
分娩までの	± 34.7	± 18.1	± 13.0
期間（日）			
内訳			
AFD 204例	18.4 ± 32.3	10.3 ± 14.9	7.33 ± 13.7
SFD 47例	35.6 ± 40.1	23.4 ± 24.8	3.75 ± 7.5



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究の目的: 超未熟児の発生状況と入院までの経過、生命予後を知る目的で研究班員施設におけるデータを収集した。

[対象] 対象としたのは 1991 年度に下記の施設に入院した出生体重 1000g 未満の超未熟児である。

研究協力施設は埼玉医科大学総合医療センター、埼玉県立小児医療センター、松戸市立病院、北里大学、東邦大学、新潟大学、新潟市立病院、高槻病院、神戸大学、兵庫県立こども病院、愛媛県立中央病院、聖マリア病院である。